

研究会に参加して

田中 康雄

近年、情報化社会や情報技術が進展し、間接体験やバーチャル体験が膨らんでいます。一方で、都市化や少子化、地域社会における人間関係の希薄化などがますます進行し、子どもたちの豊かな成長に欠かせない直接体験の機会が乏しくなっています。特に、命のかけがえのなさや死という厳粛な問題に対しては、具体的な体験をよりどころに、感動したり、驚いたりしながら、その思いや考えを広げ、深めていくことが欠かせません。

こうした状況を踏まえると、学校の内外を問わず、子どもたちに対して生命の尊厳を実感できる機会を意図的に設けることが必要です。

平成11年に石原慎太郎東京都知事は「心の東京革命」を提唱しました。これは、次代を担う子どもたちに対し、親と大人が責任をもって正義感や倫理観、思いやりの心を子どもたちにはぐくみ、人が生きていく上で当然の心得を伝えていくための取組の必要性を訴えるものです。平成12年8月に策定した「心の東京革命行動プラン」では、「動物や植物の世話をさせ、命の尊さを学ばせよう」と呼びかけるなど、東京都では、命を大切に育てる子どもたちを育てる施策を推進しています。

東京都教育委員会においても、東京都公立全小中学校で道徳授業地区公開講座を実施していただくなど、心の教育の充実に力を注いでいます。特に、学校飼育動物については、財団法人東京都獣医師会が進める「学校動物飼育モデル校事業」を、子どもたちが様々な生き物に触れ、感じ、考えながら、生き物を愛護し、生命の尊厳を実感する教育の一層の推進に資する意義深いものと位置付け、後援しているところです。

このような中、全国学校飼育動物研究会第4回研究大会が開催されました。テーマが「子どもたちの心を動かす動物飼育」ということで、子どもたちの心はどう動いたのか、その要因として動物とどんなかわりがあったのか、指導者はどんなかわりをしたのか、の三つを視点に、一日参加いたしました。本研究会に携わる方々の熱い思いに大変刺激を受けたとともに、学校での動物飼育の意義を再確認できた貴重な時間となりました。

事例報告やパネル展示など、一点一点に対して述べることは紙幅の関係でかたがたありません。しかし、子どもたちの心を動かす実践報告には、指導者のパッション(情熱)とアクション(行動力)が大きくかかわっていることが実感できました。

私としては、学校における動物飼育や動物介在教育には、以下の3点が必要と考えています。

ねらいを明確にした意図的・計画的な動物飼育
ねらいに適した、負担過重にならない動物飼育
学校の教育計画に位置付いた組織的な動物飼育
つまり、学校における動物飼育の実践の教育的価値を一層高める要件として、ミッション(使命感)、コラボレーション(連携・協働)、オーガニゼーション(組織)が必要であると考えています。

文部科学省 杉田洋 教科調査官は講演で、動物飼育を通して「命の教育」を効果的に行うためには、動物飼育の目的をしっかりと見定めて、教科等の指導計画に位置付け、獣医師などと連携を図りながら、意図的、計画的、組織的に指導していく重要性を述べられ、意を強くした次第です。

庄巻は、顧問の唐木英明先生によるパネルディスカッションのまとめでした。学校教育のねらいである「生きる力」の心の側面である「豊かな心」をはぐくむことと動物飼育との関係を、最新の脳科学や認知科学の面から意味付けていただきました。「生きる力」の知の側面である「確かな学力」の定着への敷えんも期待でき、パネリストながら強く興奮を覚えました。

私はパネルディスカッションで「学校動物飼育モデル校事業」での作文から、動物飼育による子どもたちの心の動きに、動物への愛情、生命の実感、動物への気付き、動物との関係性への気付き、自己の成長への気付き、などが見られると述べました。一方、動物飼育の効果として研究会誌の中で、獣医師の中川美穂子先生は九つ、顧問の無藤隆先生は三つを示されました。本研究会には、学校における動物飼育が子どもたちの「生きる力」の育成にどう寄与できるか、心情面や認知面で子どもたちにどんな成長をもたらすか、すぐれた実践においてねらいが実現された要因は何かなど、唐木先生のまとめを基に、実践的かつ理論的な研究を進めることを期待します。

学校における動物飼育の一層の充実に図るには、行政、学校、家庭、地域、獣医師などが連携し、意図的、計画的、組織的に当たることが大切です。

今回の研究大会で得られた成果を参考にしつつ、学校における動物飼育や動物介在教育の一層の充実に図るため、微力ながら力を尽くす所存です。

(東京都教育庁指導部

義務教育心身障害教育指導課指導主事)